灘区制 80 周年記念事業協賛　　講座「灘区の学校の歴史」　講演要旨

神戸高校同窓会館２階ホール

第３回　11 月 26 日（土）　　10:00～11:30

灘区の高校（旧制中等学校）の歴史

永田　　實（神戸高校校史記念室）

はじめに

つい最近、神戸一中校歌の歌詞が大島中学（現鹿児島県立大島高校）応援歌の歌詞に転用されていたことがわかった。奄美大島出身者が阪神間に多いということがその大きな理由だろうが、両校の広島高等師範卒業の校長・職員の間で、歌詞使用について諾否のやりとりがあったと思われる。いまも新たに判明する面白いテーマがたくさんある。

また、「高校もの」とでも表現したい出版物が多いが、わずか３年間しか過ごしていないにもかかわらず、たくさんの青春の思い出が各自の高校時代にあるから売れるのだろう。単に懐かしいというだけでなく、いまの高校教育へのヒントも汲みとれる。

１　灘区の高等学校（高校）の現況

図表１のように現在の灘区内には５校の高校がある。ほかの地域から灘区に該当する地域に移転してきたが多い。つい最近まで、神戸高校と校舎を併用した東神戸高校があったがなくなった。このほか一時、灘区内の地域にあって他地域へ移転したというようなものもある。それらすべてについて、触れることはできないので、現在の５校を中心に話したい。

２　江戸時代（近世）の教育

江戸時代の教育について少し触れておく。

寺子屋・・・庶民の教育には寺子屋があった。「寺子屋」は「寺小屋」ではない。

私塾・・・郷学・藩校と寺子屋との中間的な存在に私塾があった。幕末から維新にかけて県内に 101 あった。　→　農山漁村文化協会『江戸時代　ひとづくり風土記』28　兵庫県＜1998＞p. 197

郷学・・・藩校と寺子屋の中間的存在。武士や庶民のために藩主や民間の有志がつくった。主な郷学は兵庫県内に 41 あった。

藩校・・・武士たちの機関。旧制中学校には藩校を祖としたい要求が強い。似たような現象として、旧制中学校にはイギリスのパブリックスクールを範とする傾向がある。

３　明治以降の教育制度

明治４（1871）に文部省が新設された。翌年には、フランスを手本として、その学区制をとりいれた学制ができた。全国を８大学区に分け、一つの大学区に大学校を１、中学校を 32 置こうと決めた。一つの中学区には小学校を 210 設ける規定であったから、210×32×８の、５万 3760 校の小学校を全国に設置しようということになった。

現在の日本全国の小学校の数は、約２万４～５千なので、明治の初めに、その倍近い５万以上の小学校を置くことは可能ではなかった。ただ、このときの小学校・中学校・大学校の名称は、その後も基本的に使われた。明治 19 年に、中学校が尋常と高等に分けられ、高等中学が高等学校となった。

いずれにせよ、そのような遠大な計画は実現できず、すぐに、明治 12 年の教育令で改正された。これはアメリカを手本に教育の地方分権をはかったもので、学区制を廃止して地方の学校管理を認めるものだった。しかし「自由教育令」と呼ばれて批判され、翌年には再び教育令が改正されて、国家によ

る教育が行われることとなった。

兵庫県下では、各地域にそれぞれ中学校ができたが、明治 18 年にはほとんどの中学校は閉校された。その各地域にできた学校の例を、次に紹介しておこう。

４　兵庫県下各地の中学校

篠山と姫路の中学校

文部省ができ学制が公布され、兵庫県内に設立された中学校にはどんなものがあったか。大変面白い歴史がいくつもあるのだが、簡単に説明しておきたい。

明治６年、県下の公立中学校として、小野に昌明、姫路に勧開、龍野に龍野、の３中学ができた。龍野は脇坂家で約５万石、姫路は本多家ではじめ 25 万石（のちに 15 万石）、小野は城下町というには小規模で、城ではなく一柳（ひとつやなぎ）家の陣屋で１万石。これらの三つは大小の違いはあったが、いずれも城下町という点が共通している。そして３校とも翌年には閉校した。

明治９年には篠山にも私立篠山中年学舎ができた。この学校は、青山藩の旧藩主の援助を受けてでき、現在の篠山鳳鳴高校につながる。兵庫県で最も古い中学校はこの篠山中年学舎だが、県立に移管されたのは大正９年で、姫路中学の方が県立中学としては古い。

神戸でも明治 11 年に師範内にできたがつぶれ、もう一度できたがつぶれている。ほかにも西宮・小野・龍野・豊岡・洲本に同じ時期にできたが、いずれも数年でつぶれている。姫路中学も明治 11 年にできたものは同じようにつぶれ、明治 19 年に 14 郡が組合立でたてたものが明治 20 年に県立に移管され、現在まで続いている。これが姫路西高校の前身で、県立としては兵庫県で最も古い中学校ということになる。

５　灘区内の各高校の歴史

ところで、灘区内にある高校について、まず親和女子高等学校を取り上げてみたい。灘区の東端にある親和は、平成元年に現在の中央区から移転してきた。灘区の高校としては日が浅いが、学校の歴史をみていくうえでは面白い例である。その理由の第一は、学校創設者の人生が学校の歴史でもあり、わかりやすいからである。第二の理由は、神戸市内でも古い歴史を有しているからである。

１）　親和女子高等学校

親和の歴史は、校祖・友国晴子の人生と重なっている。

友国晴子は安政５年（1858）、八部（やたべ）郡東須磨村の旧家・友国甚左衛門の二女として生まれた。８歳（慶応元年）で母を、11 歳（慶応４年）で父も急死したため、祖母の手で育てられた。生まれつき聡明、寺子屋の師匠が「男子でないのが惜しい」と言っていた。しかし女子に学問は不要の時代だったから、父の死後祖母の意見で、寺子屋はやめさせられた。寺子屋の師匠の奥さんについて、裁縫を習った。悔しくて、裁縫を習いながら隣室の師匠の声に耳を傾けて慰めたという。

18 歳のとき眼病にかかり神戸の医師・佐伯養順のもとに身をよせた。佐伯は漢学に明るく素読を教えた。眼病が治って自宅に帰ったあと祖母の目を盗んで独学。24 歳のとき（明治 14 年）祖母も死去し、晴子の向学心は爆発し、**堺女紅場**（じょこうば）**（女学校）**（→明治 15 年、裁縫場→明治 17、小学校附属裁縫場→堺区立女学校→現大阪府立泉陽高等学校）に入学した（24 歳）。村中の話題となり批判的な意見も多かった。

明治 17 年３月、３ケ年の課程を終わって卒業、成績優秀・人物も認められて母校の教師を拝命。

明治 19 年、米国禁酒運動連盟のレビット女史一行が女学校を訪問し、晴子は接待役としてそれに接し、積極的・自主的なのに触れ、女子教育の必要を感じた。これがのちの親和女学校になった。

明治 20 年の秋、元町善照寺の門柱に「親和女学校」の看板がかけられた。これは善照寺の檀那の組

織（生善会）の設立で、発起人のなかに、晴子が世話になった医師の佐伯がいた。佐伯は堺の女学校で教鞭をとっていた晴子に、親和へ転勤するように求め、晴子は21年の春に神戸へ戻ってきた。

当時の親和女学校は裁縫にもっとも力を注いでいたが、その他の学科にも力を入れたようだ。開校当初は人気があって、生徒数も100人を超えたこともあったが、理事者側と教師側の対立があって信用を失い、しだいに衰えて24年の夏、閉鎖のやむなきに至った。

明治24年秋、晴子は上京し、大八洲学舎や共立女子職業学校で自己研修し、各種私立学校をたずねて授業を参観し、経営者の話を聞いて学校経営法を研究した。在京１年で帰郷し、学校再建に乗り出した。善照寺の院主から「親和」の校名を継承してほしいと申し出があり、よろこんで承諾した。

明治25年11月２日、神戸市下山手通６丁目の民家で再発足した。親和を襲名。応募したのは善照寺時代の生徒２名、教員（晴子）１、使丁１（おとらおばさん）。費用はすべて晴子の努力で。寺からはオルガンと黒板１枚、大火鉢とやかん。まごころ込めた教育で、生徒10名となった。なかには大いに広告して生徒を集めたらという人もあったが、「教育は営業ではない」としりぞけた。

これに対して、仏教主義の「敬神崇祖」を旨とする親和女学校は、因習的性格の強い中流家庭に受け入れられやすかった。日清戦争（明治 27）時、晴子は仏教婦人知恩会の幹事長として、神戸駅頭に出征兵士を送り、傷病兵を慰問し、めざましい活動をした。

日清戦争後、生徒は急激に増加し、明治35年には300名をこえた。校舎の増改築のために資金獲得のため、頼母子講を組織して30坪、50坪と増築。老朽化した建物の四方から材木でつっぱりをしていたため、世間では「下山手のつっぱり学校」と呼んだ。

明治29年、下山手７丁目に300坪の土地を借り32坪の新校舎。「堅忍不抜、克己復礼、温和柔順」の校訓３か条制定。「堅忍不抜」は女子校では珍しい。晴子の本領を示している。

同窓会(汲温会)発足。名前は晴子の案で、古今和歌集の「いにしへの野中の清水温（ぬる）けれど　もとの心を知る人ぞ汲む」から。同窓会館を汲温会館と呼ぶ。汲温は「旧恩」「旧温」にかけている。

明治31年、校則を改正、本科５年、専科３年。

明治33年、生田神社の分霊を校内に奉斎し（講堂に祭祀)、職員生徒は朝夕礼拝。終戦まで46年間続けた。

明治34年、校地の一部にあたる私有地（743坪）の払い下げを受ける。

明治37年には、神戸市から補助金が交付され、校舎の増改築が行われた。

明治41年、私立親和高等女学校設立が認可され、定員本科400、技芸専修科90という、県下有数の女学校へ。校訓を「誠実、堅忍不抜、温和柔順」と改定。その趣旨を菊・葵・鏡に象って校章を制定。校旗も制定。

大正６年、校歌制定。

大正８年、大正天皇、摂播に陸軍特訓大演習、侍従武官を本校に差遣し「此地の教育家、事業家にして功績顕著なるものに、特に差遣の命あり･･･」との伝達を受け、晴子は感涙にむせんだ。

大正９年、９月 63 歳で脳溢血。この頃、内紛が生じた。財政上経営難に陥ったため、寄付募集のため評議員を３名増やしたが、その３名が学校内部の介入するようになったことや、生徒が舎監退任を要求したことなどがからんでいた。事件決着後の 10 月、晴子は御影師範学校長・和田豊を校長にし、自らは校主に退いた。(大正14年死去）和田豊は円満なる人格と宏大な気宇を具有し、自由を重んじる校風の礎を作った。

昭和７年、近隣地の校地拡張を重ね「当時として最も近代的な鉄筋コンクリート造りの４階建て校舎が誕生。」新校舎の屋上に分霊を安置。この間、灘区原田の旧関学校舎を借りて授業を行った。

昭和 10 年、和田校長が退職し、元大阪高等学校長の野田義夫が校長に。野田は着任して、断髪の容認や制服の制定など、時代に添った改革を進めたが、汲温会員や父兄から避難攻撃の声があがった。また12年３月の卒業式で教育勅語を手から落とすという出来事があり（脳溢血の軽い後遺症)、不敬事件

として批判を浴びた。入学志願者が一時的に減少し、伝統を傷つけたとされた。(18 年に退任)
昭和 61 年８月、神戸市当局から灘区土山町の神戸外大跡地分譲の示唆を受け、8000 坪の校地を獲得。
昭和 63 年、新校舎落成。
昭和 64 年度をもって下山手から六甲台に。

晴子の人となり

30 数年間校内に住み、生徒と一緒に風呂に入り、夜中にも寄宿舎を巡回して布団を着せてやった。創立当初から仏教団体と因縁があった。

早天に柏手を打ち神祇を拝し、仏前に合掌して名号を称えるのを常とした。キリスト教は心から嫌っていた。卒業生で日清戦争に従軍看護婦として召集され、その間にキリスト信者になって洗礼をうけた者は、晴子の怒りをかい厳しい勘気を被っている。

肥満体質で、40・50 歳になっても体重は 20 貫をこえていた。毎年夏には暑い暑いを連発し、両手に団扇をもって左右からあおいだ。鼻下にはヒゲがあり、髪は早くから薄く丸髷にタボを入れていたがよくずれて困った。

食事は寄宿生と同じで質素だったが、量は生徒の倍という大食漢で、毎朝、生卵１個、牛乳１合を湯呑でかき回してのみ、底にたまった滴を手のひらに落として顔や手につけ、クリームなどは一切使わなかった。甘いものが大好きで、夏にはかなり大きなスイカでも一つくらい平気で平らげた。

寄宿生の裁縫教材に使った継ぎはぎだらけの長襦袢を大切に着ていたため「東海道五十三次の襦袢」と生徒に陰口されるほどだった。

２） 松蔭高等学校

プロテスタント系＞日本聖公会系＞英国系：プール学院（大阪)、桃山学院（大阪)、米国系：立教学院

①でみた親和よりも早くにできていたのは、英国聖公会系の松蔭である。

明治９年、ＳＰＧの神戸での伝道が始まった。ヒュー=ジェームス=フォスとプランマーが神戸に到着した。神戸山手付近の「山九番」に住み、プランマーは病気で帰国したため、フォスが明治 11 年に「**乾行義塾**」という男子校を立てて英語や数学などを教えた。最初は栄町４丁目にあった。

明治 25 年、松蔭女学校が神戸市北野町の三本松の近く（山本通１丁目 10 番）の九鬼邸を借りて設立。同年、中山手通６丁目に移転。

明治 26 年、中山手通６丁目、聖ミカエル教会の北に校地を購入し、移転。

明治 28 年、裁縫専修科（３年）を設置。

明治 29 年、英語専修科、和漢文専修科（ともに２年）を設置。

明治 32 年、12 月、私立学校令による認可（各種学校としての認可)。予科を廃止し、本科の上に高等科を新設（２年)。

明治 38 年　この頃、三蓋松の校章ができる。

大正４年、松蔭高等女学校に。松蔭女学校は廃止。

大正 11 年、財団法人私立松蔭高等女学校の設立認可。

大正 13 年、最初の水泳キャンプ、淡路の江井町。

大正 14 年、夏・冬の制服着用が始まる。

昭和４年、現在地に移転。

昭和 11 年、第１回運動会。遅い印象を受ける。

昭和 12 年、筆答試験を廃止して口頭試問による入試。

昭和 14 年、校歌制定、作曲者山田耕筰を招いて発表会。高等女学校 23 回卒業生(163 名)の卒業記念として学校に寄贈した。

昭和 16 年、全国中等学校の統一服を着用することとなる。
昭和 18 年、修業年限が４年に。

３） 神戸高校

① 県立第一神戸中学校

姫路と神戸

神戸に中学校ができたのは、これらよりかなり遅れて、明治 29 年だった。姫路の場合は明治 19 年の組合立のものが翌年には県立になっている。なぜ姫路の中学校を県立のものとし、神戸には中学校が置かれなかったのだろうか。

一口でいえば、姫路は城下町で教育・文化に対する理解があり、神戸は港町でそのような雰囲気がなかったということになろうか。神戸と同じ年に豊岡でも中学校ができたが、その開校に対してそれぞれの町の住民たちの反応は神戸では盛り上がらず、豊岡では盛大に祝っているという新聞記事からもわかる。

兵庫県の姫路と神戸の関係に似た例が、青森県の弘前（城下町）と青森（港町）である。青森の場合は、青森につくった最初の中学を弘前（現弘前高校）に移転している。

初代校長・鶴崎久米一（昭和 29 年～大正 12 年、在任 27 年３カ月）

札幌農学校・空知集治監時代

安政 6 年（1859）、鍋島藩の支藩諫早藩士の家に生まれた。そこから長崎の英語塾に入り、明治 10 年には東京に出て、神田錦町の英語私塾に入る。そこから札幌農学校に入学した。農学校の募集は東京で知って応募したのではないか。

久米一は明治 10 年、札幌農学校の２期生 18 名の１人として入学した。２期生には、太田稲造（のちに新渡戸姓）・内村鑑三。宮部金吾などがいた。「イエスを信ずる者の誓約」にも署名しているが、宮部・内村・太田ら７名と違って、終生キリスト教徒であった訳ではない。

毎年発行された『札幌農黌年報』では成績がわかる。内村はほとんどつねに１位であった。４年時には 12 名となっていて、２期生の卒業記念写真には久米一も写っているが、諏訪鹿三とともに３期生（18 名）として卒業することとなった。この体験は、久米一の一中経営上反映されているのではないだろうか。

農学校卒業後は、空知集治監で農業森林係長として、施設の整備やかんがい工事などに当たったと推測される。その後、新潟農学校に転じ、愛知県尋常中学校（現県立旭丘高等学校）、長崎県尋常中学校から神戸中学校の初代校長となった。

神戸中学校校長に

なぜ久米一は神戸に来たか。兄・平三郎との関係があったと推測する。

平三郎は明治 16 年に東大医学部卒業と同時に兵庫県神戸医学校に赴任し、県立姫路病院長を兼務した。22 年、人力車で姫路とを往復している途中、冬なのに牛がしっぽで蝿を追うのを見て、須磨が温暖な地だと確信し、二の谷から三の谷付近の山地を購入した。それ以前に眼病のため病院職を退任し、結核専門の「須磨浦療病院」を創設した。平三郎が、県に弟を推挙したのではないか。

カーキ色の制服

明治 40 年に二中が開校されて、カーキ（カーキー）色の制服が採用された。42 年の新入生（15 回生）からは一中でも採用した。いわば、逆輸入である。

カーキーの語源は、インドのヒンディー語であり、イギリスが支配したインドの大地の色に由来している。これが大英帝国の兵士の軍服の色となって、日本にも入ってきたが、日本では草色のことをカーキー色と称するようになった。カラー写真がなかったから、色の混乱が起こったといえる。

立ち食い

この由来は、はっきりしない。初代校長・鶴崎久米一が北海道で見た農民が弁当を立って食べる習慣に由来するという説がある。小松左京（一中 49 回生）は、鶴崎が育った諫早付近の漁民が舟のなかで立って食べたことからだと書いている。

当時の中学校で、生徒が立って食べることは珍しくなかったが、神戸一中のように全員に強制したところは珍しい。

初代講堂

現在、豊岡高校の達徳会館があるが、これは一中初代講堂と同じものである。それは、一中と豊岡中学は同じ年に同じ予算でたてられたからだ。一中はその後、２代目の講堂（現在地に移築され旧講堂と呼ばれた）ができ、初代講堂は大谷光瑞がつくった武庫仏教中学にもらわれて、その後、平生釟三郎の甲南学園のものになった。昭和 40 年代まで岡本で、甲南大学の倉庫として使用されていた。

２代校長・池田多助（大正 13 年～昭和 20 年、在任 21 年８カ月）

神戸中学３回生

３回生には今西嘉蔵もいる。池田は野球部創設の頃の選手として活躍した。中学卒業後は、広島高等師範（1 回生）に進み、その付属中学に勤めた。

最近発行された『大阪府立生野高校九十年史』（2010. 10）では、多助を「たすく」と読ませている。神戸高校関係者では「たすく」と読む者はいない。

キリスト教とのつながり

広島高等師範時代に受洗したと思われるが、晩年には宗教にはこだわらなかったようである。しかし、彼の思想にはキリスト教的なものを感じる。その代表が**「光塩会」**の設置ではないか。これは池田の時代に、教頭の加藤直三がはじめた。公立中学では珍しい聖書研究の会で、戦後の神戸高校でも継続していた。

池田は前任校の生野中学（府立第十二中学）では初代校長として「生野を霊の道場、魂の学校とすること」を教育方針にあげている。

学校教育とスポーツ

池田は、上級学校への準備教育の傾向が強いなかにあって、全人教育を説いた。また、学校体育を推奨した。運動会最終種目の遠距離走を独立させ、恒例の全校行事とした。有馬競走遠足もあった。

一誠神社（東郷神社）

校舎移転とともに本館裏の斜面に、東郷平八郎の遺髪を祀った神社をつくった。台湾の学校で神社を作った例はあるが、本土でこのような例は聞かない。「一中は矛盾の総体であった」という言葉を見たが、確かにそのような気がする。

自治組織の戊辰（ボシン）会

昭和３年（戊辰ーつちのえたつーの年）頃、結成された。前年の運動会での騒動が、直接の原因であろう。池田は真の自治組織を作りたいと考えて、５学年に**年級指揮官**を設け、１年から４年までを指導するようにした。全体の指揮官を総指揮官と称した。この年級指揮官制度は、神戸高校でも「指導員」（のちに「世話係」）の制度として受け継がれることとなった。年級指揮官は１年間を通じて任務についた点に大きな違いがある。

②　第一神戸高等女学校

初代校長・永江正直

明治 34 年　授業開始。６月には生徒の服装を筒袖の綿服にえび茶袴と決定し、頭髪は束髪と指定。これは全国の女学校に大きな反響を呼んだ。（『神戸市教育史』１、p. 418）生徒は良家の子女が多く、

かえって材料の入手に困り、父兄の理解も得にくかったので、校内だけで着用していたが、教師が率先して通勤時も使ったので生徒もならうようになったという。

初代校長・永江は開校後、わずか２年、明治 36 年に休職扱いとなった。明治時代**「教科書疑獄事件」**と呼ばれ全国で、知事４人、師範学校長 21 人、府県視学 23 人、中学・女学校長 15 人の有罪者を出した大事件に連座したためであろう。

県一と体育

体育に積極的で、男子と同じ筒袖を採用した。自治指導組織の運動係は、毎日運動時間に校内を巡視し、生徒が運動場に出るよう指導し、各種の競技会を開いた。とくに姿勢に対する指導は熱心で、作法や体育以外の授業でも常に注意した。生徒の姿勢がだんだん良くなっていったが、「県立の生徒は威張った歩き方をする」などと陰口をたたく者がいた。

２代校長・篠原辰次郎（明治 36 年～昭和４、在任 26 年２カ月）

セーラー服の制服

大正９年、主として体育の観点から洋服を制服として取り入れることとなった。最初はワンピース風であったようだが、詳しい記録はない。２年ほどでセーラーカラーのツーピースに変わった。

青い眼の人形

昭和２年にはアメリカから１万２千体の人形が、**親善人形使節**として日本に贈られてきた。３年前の大正 13 年に日本人排斥の新移民法がアメリカ議会で成立し日米関係に亀裂。親日家の宣教師シドニー・ルイス・ギューリックが発案し、日本側の渋沢栄一に協力を求めて実現。

昭和２年２月から、横浜・神戸に上陸して、兵庫県には 373 体が割り当てられた。そのうちの一部が３月 1 日、神戸三越で、一部（55 体）は歓迎会場となった県一に運ばれて開封された。西洋作法室で県一と神戸女学院の生徒が接待係を務めた。現在、兵庫県で確認されているのは８体。親和にはそのうちの１体が残されている。

運動会

明治 19 年には東京女子師範学校がダンス（コチロン・カドリールなど）の講習会があった。その後身、東京女子高等師範学校の卒業者が各地に広めた。神戸高校でも長くカドリールを数曲踊っていたが、昭和 50 年代にはなくなった。親和ではまだ継続していると聞く。

通知簿の廃止

昭和３年、保護者に説明があり廃止。成績は学期末の個別面談で通知。学制改革で県一がなくなるまで続く。当時の卒業生の言葉に「本能的に勉強した」がある。

皇女和宮の像

昭和８年 11 月地鎮祭、９年４月除幕式。神戸市内の３高女に中村直吉が寄贈した。中村は昭和３年に神戸市内の小学校に二宮尊徳像を寄贈した。外遊で西欧の女性たちの質素で勤勉な姿を見て、日本女性の伝統を伝えねばと思い、和宮像を贈った。県一・県二と自分の娘が通う市二に寄贈した。

③　神戸高等学校

初代校長・高山忠雄（昭和 23 年～昭和 40 年、在任 16 年５カ月）

44 歳で着任。サッカーの指導、先進的な教育方針、たとえば週休２日制を模索した。以下、特徴的な事柄のみ列挙しておく。

歌集『Songs　To　Remember』

『講演集』

自治会の名称

アセンブリー
卒業証書の横書き
国外へのサッカー部の親善試合、合唱部の親善演奏

４） 六甲高等学校

カトリック系＞男子修道会系＞イエズス会系：上智大学、栄光学園（神奈川）・広島学院
昭和 12 年、カトリック教会の一修道会である、イエズス会を設立母体として財団法人六甲中学校創立。
昭和 13 年、木造校舎完成。開校。大水害の被害を受けた。
ドイツで教育学を専攻した**武宮隼人**が、弱冠 35 歳で校長に就任。27 年間勤めた。
武宮の信念を持った教育には興味深いものがある。たとえば、入学試験の判定の際、他校で拾ってもらえないような子こそ本校で教育すべきだという考えや、自らの家庭訪問、全校生徒の名前と住所を知っていたことなど。また、生徒指導でも、校舎から見える送電線の鉄塔まで行って布をくくって来いと指示し、別の生徒にほどいて来いと指示するなど、ユニークであった。
13 年の大水害で流れてきた石に、武宮の筆になる彼の言葉がある。
「すべてのものは／過ぎ去り　そして／消えて行く　その／過ぎ去り消え去って行くものの／
奥に在る／永遠なるもののことを／静かに考えよう」
昭和 16 年、鉄筋４階建ての本校舎完成。
昭和 23 年、新制六甲高等学校に。
昭和 25 年、学校法人六甲学院。
昭和 40 年、第２代校長としてシュバイツァーが就任し、本館の増築、理科校舎建設、久美浜学舎の建設などの改革。１学年３クラスを４クラス編成にし、進学指導を強調、大学進学が飛躍的に躍進。

５） 神戸海星女子学院高等学校

カトリック系＞女子修道会系＞マリアの宣教者フランシスコ会：海星女子学院（神戸）・福岡海星女子学院・宇都宮海星学園が同じ系列。神戸・福岡・宇都宮の基幹校は神戸海星女子学院大学である。マリアの宣教者フランシスコ会は瞑想と奉仕の生活を掲げて、19 世紀にインドで創立した。
昭和 26 年、青谷に神戸海星女子学院を設立。小・中・高移転。
昭和 49 年度から週５日制。
平成 22 年、従来、日本カトリックの故郷、長崎・熊本を訪ねてきたが、この年から理念の根源を求めてフランスへ修学旅行。

おわりに

・神戸の中等学校はキリスト教との結びつきを抜きにして語れない。ミッションスクールの利点は、英語教育に有利であったことだ。　→佐藤八寿子『ミッション・スクール　あこがれの園』（中公新書、2006.9）
・神戸は大阪とならぶ大都市であったために、その経済力をバックとして特色のある学校が生まれた。
・阪神間の学校で一中（公立中学）との関係で成立した例が多い。
灘・甲陽の例は有名である。
甲南学園も、創設者・平生釟三郎の日記を読むと、長男・太郎が神戸の中学校に入れないという悩みを書いている。ちなみに三女・冨美は県一（17 回生）の卒業である。
育英・神戸龍谷・甲南女子・甲子園学院・三田学園などは、一中の元職員や卒業生が創設者・校長などとして活躍している学校である。
・今回、触れることができなかったが、旧制時代の公立中等学校の校長（職員）は、全国的に異動しており、面白い現象がある。

- 戦後間もなくは、公立であっても私立と変わらない面があったが、現在、公立は私立と比べ大きな制約を受けている感じがする。「危ない、時間がない、金がない」と、色々な面で中身が痩せてきているのではないだろうか。